6．長谷古墳

1．古墳の概要

福知山市夜久野町額田51番地付近、府道707号線（小坂青垣線）沿いの丘陵裾に位置していたと考えられる。水路工事に伴う法面掘削工事によって発見されたが、工事終了後に教育委員会へ通報されたため詳細は不明である（夜久野町史編集委員会2006）。遺物のラベル、及び遺物を収容するコンテナ内のメモによれば1992年３月30日から1993年４月の間に夜久野町内の拾得者より夜久野町教育委員会に移管されたとみられる。（守田）

2．出土土器

（1）概要

須恵器の杯が１点、椀が２点、高杯が１点、瓶が１点出土している。１は口径10.4cmを測る杯で、底部はヘラキリ不調整である。２は口径9.0cmを測る椀で、口縁部がややすぼまり体部には１条の凹線がめぐる。底部はヘラキリ不調整である。3は口径10.4cmを測る椀で、口縁部がまっすぐ立ち上がる。底部はヘラキリ不調整で、切り離しにあたり補助ケズリが施されている。４は口径11.0cmを測る口縁部にたちあがりをもたない低脚の高杯である。脚部の接合前に杯底部には回転ヘラケズリが施されている。５は口径12.4cmを測るやや頸部の長い瓶である。口径が胴部径よりも大きく、平底であるのが特徴である。体部下半には回転ヘラケズリが施されているが、底部はヘラキリ不調整である。６は最大径18.5cmを測る平瓶で、風船技法による塞ぎ目が観察される。体部の稜線は丸く明瞭でない。体部下半は回転ヘラケズリが施されているが、底部はヘラキリ後に粗くナデ調整されているのみである。

（2）時期

平瓶は器高が高く、初現的な様相をもつ。瓶は平底化しており、７世紀に通有の形態である。杯や椀は器形や調整が太田森２号墳出土品と共通し、太田森２号墳と同様に７世紀前半～半ば頃を想定することができる。全体として７世紀前半ごろの資料群とみなせよう。（溝口）

3．出土鉄製品

（1）刀子（図２－１、写真２－１）

残存長15.4cm、重さ34.0g、刃部は残存長12.2cm、最大幅1.9cm、最大厚0.6cm、茎部は残存長3.2cm、最大幅1.6cm、最大厚0.5cmである。背側に斜角関が認められるが、腹側は関部付近が欠損する。腹側には関をもたないか、ごく浅い関が設けられていた可能性がある。茎部には柄材とみられる木質がかすかに付着している。肉眼観察による限り、遺存する範囲に目釘は確認できない。

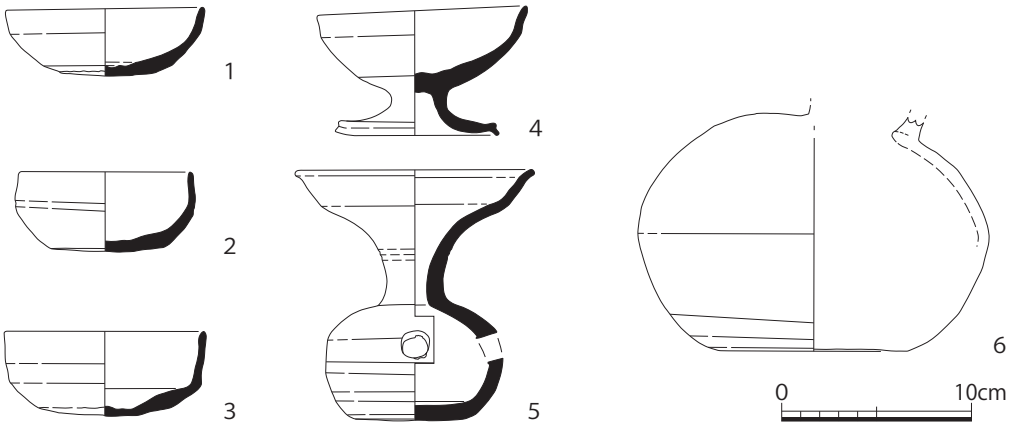

図１　長谷古墳出土土器（S=1/4）

表１　長谷古墳出土土器観察表

番号	器質	器種	法量(cm)			残存率	色調		胎土	焼成	技法上の特徴	備考
			口径	底径	器高		外面	内面				
1	須恵器	杯	10.4	—	3.6	完形	灰白色	灰白色	密（φ2㎜以下の白色砂粒・黒色砂粒を少量含む）	硬質	底部ヘラキリ不調整、ロクロ時計回り	底部に補助ケズリ、口縁部に錆らしき付着物
2	須恵器	椀	9.0	5.8	4.2		暗青灰色	暗青灰色	密（砂粒をほぼ含まない）	硬質	底部ヘラキリ不調整、ロクロ時計回り	
3	須恵器	椀	10.4	—	4.5	完形	褐灰色	灰白色	密（φ1～3㎜の白色・褐色砂粒を多量含む）	硬質	底部ヘラキリ不調整、底部内面静止ナデ、ロクロ時計回り	底部に補助ケズリ
4	須恵器	高杯	11.0	8.5	6.8		灰白色	灰白色	密（φ2～3㎜の砂礫を多量、φ5㎜の砂礫を少量含む）	軟質	杯部底部ヘラケズリのち脚部接合、ロクロ時計回り	
5	須恵器	壺	12.4	—	13.2	体部100%頸部25%	灰白色	灰白色	密（φ1㎜の白色砂粒、φ1㎜以下のの黒色粒を少量含む）	良好	体部下半回転ヘラケズリ、底部ヘラキリ不調整、ロクロ反時計回り	体部上半の外面から頸部内面まで自然釉付着
6	須恵器	平瓶	—	10.0	—	口縁部欠損	灰白色	青灰色	密（φ1㎜程度の砂礫を多量含む）	硬質	体部下半回転ヘラケズリ、底部ヘラキリ後粗いナデ	体部上半に自然釉付着

（２）鑷子状鉄製品（図２－２、写真２－２）

右脚部が欠損しているものの全体の形状を知ることができる。全長11.2cm、重さ28.0gで、頭部は幅1.8cmの円形、脚部は「ハ」字状に直線的に開いており、両端は接しない。側面幅は頭部と先端部が0.8cmとやや細いが、頸部から脚部にかけておおむね1.0cmとほぼ一定の幅を保っている。厚さは頭部で0.6cm程度をはかり、脚部は肩部から先端部にかけて徐々に厚みを減じていくが、先端を尖らせた形跡はない。頸部をしっかりとつくりだしており、宇野慎敏（1985）分類のⅡa型式に相当する。連結金具は出土していない。

（３）蹄鉄（図２－３、写真２－３）

鉄頭先端がわずかに欠けているもののほぼ完形で、残存長9.8cm、最大幅9.1cm、最大厚0.5cm、重さ74.3gである。左右鉄枝にそれぞれ４孔、計８孔の隅丸方形の釘孔を接地面側から穿けており、釘孔の上下にはかすかに釘溝がめぐる。断面図をみると接蹄面は平らなのに対し、接地面は鉄頭付近で厚みを減じており、使用に伴う摩耗の可能性が高い。蹄釘は出土していない。

現在の蹄鉄は馬の蹄形状に合わせて「前肢の蹄鉄はやや丸く、後肢の蹄鉄はそれよりやや卵円形」（日本中央競馬会1976：164）をしており、本例は鉄頭側が尖った長卵形の平面形を呈すること、接地面左側がやや膨らんでいることからみて、左後肢に用いられたのであろう。蹄鉄は明治時代に入るまで普及しなかったとするのが一般的であるが、本例の幅から復元される蹄幅はサラブレッドなどの洋種馬よりも在来馬（和種馬）に近似している（井上ほか2004：472）。水路工事に伴う法面掘削工事の際に出土した収集品であり、確実に古墳に伴うかは定かでないが、古墳時代に併行する朝鮮

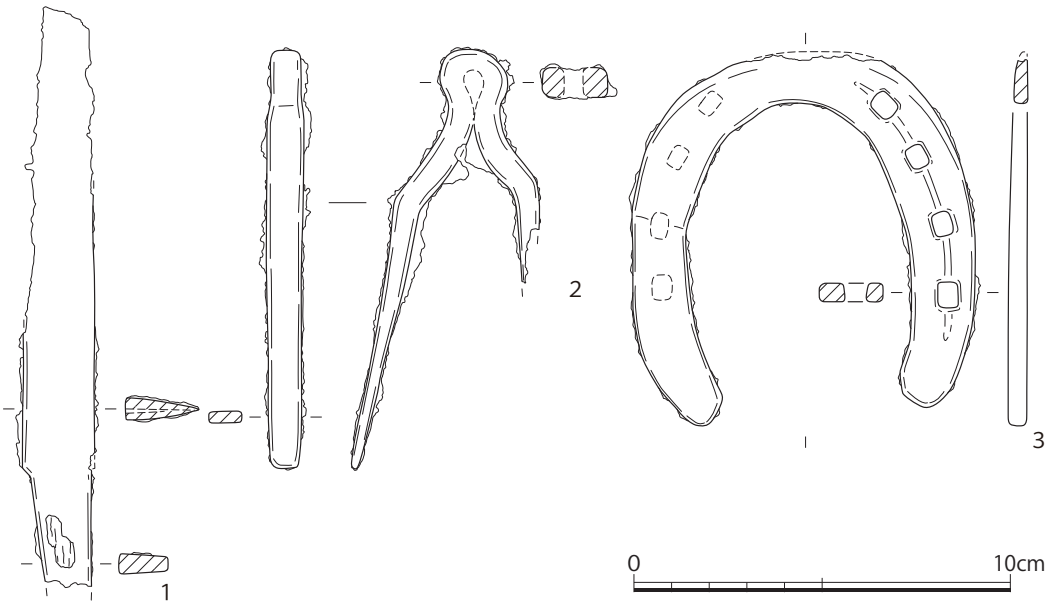

図２　長谷古墳出土鉄製品（S=1/2）

三国時代には出土事例も散見される（諫早2014）。出土状況に関する記録がないため、古墳副葬品かどうか慎重に判断する必要があるが、サイズからみて本例が少なくとも洋種馬に用いられたものでないことは確かであろう。

４．小結

長谷古墳は、1990年代前半におこなわれた水路工事の際に遺物が発見され、夜久野町化石・郷土資料館に所蔵されているが、『夜久野町史』第二巻（資料編）に簡単に言及されるのみで、詳細については未報告であった。今回、出土遺物の入ったコンテナを整理した結果、須恵器５点（杯１点、椀２点、高杯１点、甕１点）、鉄製刀子１点、鑷子状鉄製品１点、蹄鉄１点が出土していることが明らかとなった。墳丘形態・規模や埋葬施設についてはまったく不明であるものの、須恵器から７世紀前半頃に築造されたとみられる。須恵器と一緒に発見された刀子、鑷子状鉄製品は同じ古墳から出土した副葬品とみられるが、蹄鉄については朝鮮半島三国時代の出土事例はあるものの、日本列島古墳時代の出土事例はない。本例がもし長谷古墳に伴うものであれば、日本列島で蹄鉄が普及した明治時代を大きく遡るが、正確な出土状況がわからないため、積極的な評価は控えておきたい。　　（諫早）

参考文献

諫早直人 2014「高句麗の蹄鉄―最古の蹄鉄をめぐる一試論―」『ユーラシアの考古学』（高濱秀先生退職記念論文集）六一書房

井上昌美・坂口　一 2004「古墳時代馬の体高推定―群馬県子持村・白井遺跡群出土のウマの蹄跡からの分析―」『研究紀要』22　群馬県埋蔵文化財調査事業団

宇野慎敏 1985「鑷子考」『末永雅雄先生米寿記念 献呈論文集　乾』末永先生米寿記念会

日本中央競馬会（編）1976『競馬百科』みんと社

夜久野町史編集委員会 2006『夜久野町史』第二巻（資料編）福知山市

写真１　長谷古墳出土土器

写真２　長谷古墳出土鉄製品（S=1/2）（番号は図２に対応）

編集後記

本書の執筆・編集には、筆者含めた学生も少なからず携わった。思えば初めて末窯跡群の踏査に参加した時は、山の中で右も左もわからず先輩の背中にひっついていき、落ちている土器に夢中になっていた。後輩を先導する立場になると手元の地図と睨めっこしつつ、採取した土器の記録や、整理作業の日程を考えた。夜久野では先輩方の歩みも蓄積しており、私自身も他分野の先生方との合同踏査や資料の分析、成果報告会の開催などの得難い経験をした。その成果をこうして1冊にまとめ上げる段階に関わることができたことは感慨深い。多くの人と関わり、貴重な資料に触れる機会を得たことに感謝したい。（も）

表紙・裏表紙写真

上左：夜久野末窯跡群の調査風景

上中：長者森古墳

上右：ボーリング調査風景

下　：夜久野末窯跡群の遠景（ナゲ地区）

（以上、菱田撮影）

裏表紙：小倉田古墳出土双龍環頭大刀

（栗山雅夫氏撮影）

京都府立大学文化遺産叢書　第28集

夜久野の後期古墳と末窯跡群

編　集　菱田 哲郎（京都府立大学文学部教授）
　　諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
　　〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町1-5
発　行　日　2024年3月29日
印　　刷　北斗プリント社
　　〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町38-2